

遅い目覚めながらも

あべみつこ
阿部光子 (本名山室 光)

大正11年東京生れ。日本女子大中退。

日本文芸家協会、女流文学者会所属。

「猫柳」「ルツ物語」などの作品がある。

第五回田村俊子賞、第八回女流文学賞を受賞。

現住所：東京都北多摩郡狹江町和泉 2648

遅い目覚めながらも

昭和四十四年一月二十五日 発行
昭和四十四年八月十五日 五刷

価六〇〇円

著者 阿部光子

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(御)二二二(大代)
振替東京八〇八番

(乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします)

印刷・光邦印刷株式会社 製本・植木製本所

● Mitsuko Abe, Printed in Japan 1969

目次

花の十字架

五

鏡のおもて

七

神学校一年生

二三

土の中の世界

一五三

遅い目覚めながらも

一九九

装帧者 高木雅章

遅い目覚めながらも

花の十字架

かなり急な坂道を登って来て、もう一息と足を留めた。その曲り角の茂みの中に、教会堂がひょくくりと出現した。訪ね訪ねて来たものが、あまり突然に現われたので、わたしは少し気を悪くして、その古びた木造の小さな会堂をしげしげと見詰めた。

会堂は戦災にあわなかったとみえて、心おきなく古び、つたなどもからみ、教会堂というイメージを素直にあらわしていた。会堂の横の小さな庭越しに見下ろされる街は、大東京の余波が押し寄せて来た形で、俄作りの感じのする家がちやちやと固まっていた。

その時、静かな足音をさせて、坂を登って来た和服の老婦人が、わたしに会釈すると、「お這入りになりませんか、お庭の桜草がきれいでございますのよ」と言った。

老婦人のあとにつづいて、わたしが這入っていくと、会堂には十人足らずの人々が腰かけたり、立ったりしたままで話をしていたが、わたしを見ても別段の興味を示す様子 wasn't なかった。新しい顔を見ると、すり寄って来て、身許調査をする習慣は、この教会にはないようだった。この門に入って救われなくても、桜草を見て帰ってもいいことになっているのである。

牧師の説教が始まる頃になって、どうやら席は一杯になった。しかし、人数はまず三十人余りだった。この教会に、わたしが来なければならなかったきっかけを作った、わたしの神学校の

同級生は、——ごくのんびりした教会だから——としきりに言った。

かの女は結婚して夫の任地に赴くため、わたしにこの教会での自分の仕事の後任になって欲しいと頼みこんだのだ。もし、わたしが厭だといえ、責任感の強いかの女は、結婚を延期するのではないかと心配になるほど、かの女の頼み方は熱心だった。わたしは生意気にも人助けのつもりで引受けたが、かの女は駆引きなく、本当のところを告げたのだった。

オーガニストの若い女性は、近眼なのだろう。しばしば讃美歌の譜面に顔を押しつけるが、意に添わぬ指が、はつきりと間違った音を押し出すのだった。かの女自身も時々やにやと笑いながら、テンポさえ狂う曲を弾いていた。

牧師の説教はパウロがローマびとに送った手紙の中のへ食べる者は食べない者を軽んじてはならず、食べない者も食べる者をさばいてはならない」という箇所であった。そして、何を食べていいの悪いのと苦にする人が多い。それどころか、クリスチャンともあろう者が、人に酒をのむなとさえ言う——と言った。わたしは目をまんまるくした。

しかし、別段、牧師はわたしの夫へのあてつけを言っているのではないようだった。無論わたしのことを牧師に紹介する時、友人はわたしがあの親の代から禁酒禁煙のプラカードを掲げている社会事業家の家族だといったことだろう。そのついでに、わたしの夫が親の創立した団体から追出されて、みじめな生活をしていることや、わたしが五十にもなって、売れない小説を書いていう変り者で、何を発心したのか、この頃、神学校に入学して来て、居眠りばかりしているのだといったことだろう。しかし、説教の途中で聴衆の一人の身の上を思い出すこともないだろうし、そんなことにこだわるなんて、自意識過剰というものだ、わたしは安心して、クリスチャンでも

酒はのんでもいいという話をきくことにした。

この牧師は、わたしたちの神学校の先輩で医者だった。前から一度、この人の話をきいてみたいと思っていたが、不精者のわたしは、自分から動くことのできないたちで、こうして、人に引っぱられて、この牧師の前に坐るということになったのだった。しかし、与えられた機会というものには尊いものだ。居眠りもせずに聞いている内に、酒でも何でも、感謝して口に入れば悪いものはないということが分つて来た。

牧師はちょっと思ひ出し笑いをしながら、何と説明しても食物にこだわる人に、へ口より入るものを汚さず、という聖書の言葉をひいて、酒でも煙草でも、こらえてのまないよりも適宜にのんだ方がよろしいと言ったら、首を傾^かげて、——でも煙草は口から這入って、また出ますから——と心配げに言ったと話した。皆が笑ったのでわたしも笑った。

わたしの心の中で何かのかたまりがほぐれていくような気がした。実のところ、わたしは酒を少々飲むと元氣が出て、仕事もはかどるたちだった。しかし、禁酒禁煙の家において、子どもも見ているのにとこらえていたが、仕事のかさがひどく大きくなった時、ソースびんにブランデーを仕込んでおいて、そつと紅茶に垂らしてのんだ。母親がゴソゴソやることは、子どもにはすくびく。ある日曜日、おやつに紅茶をいれていたら、

「おかあちゃん。ぼくのお紅茶にソースを垂らしてよ」

と、末の子が言った。わたしが返事に窮していたら、夫は眉も動かさず、

「紅茶にソースなんか垂らすと胃がわるくなるよ」とたしなめた。

幸い、子どもはそれっきり、何も言わなかったから助かった。しかし、大げさにいえば、罪の

意識のようなものが、わたしの心の底に疼いた。

宴会などでも、初めは盃を伏せておくことにしたが、このごろでは図々しくなって、心やすい友人と、——禁酒会創立者のために乾盃——などとやったりする、しかし、酔心地はあまりよくない。多分、疑いながら食べる者は信仰によらないから罪に定められる——ということなのだろう。それにしても、聖書の言葉というものが、こんなに生活に適用できるものだったのか。わたしはとうとうこくりとも居眠りをせずに四十分ばかりの説教を承った。そのおかげで、酒は疑わずに、神に感謝して頂戴することを覚えた。やはり人が一マイル一緒に歩けといったら二マイル行つてやれとキリストが言われたのは本当だ。この年になつて得手でもない宗教雑誌の編集を頼まれるとは——と危なく、同級生の後任を引受ける話は断わるところだったが、素直に引受けてよかった。今日、ここに来なかつたら、わたしは一生、心にやましい思いを持って酒のみ、あるいはのめずに宙ぶらりんの生活をしていたことだろう。

嬉しさのあまり、わたしはそのまま帰ろうとして、牧師によびとめられた。現金とはこのことだと恥入り、わたしは牧師と雑誌編集の打合せをした。三十頁ほどのうすい雑誌で、牧師の説教と聖書講義とのあとに、会員の消息をのせるだけのものだったから、別にむづかしい話もない。どうぞよろしくというようなことで、牧師はわたしを教会の長老格の人に紹介した。

わたしは帰り道の方がふわふわと雲の中を歩いている心地だった。どうやら駅に辿りついた時、先刻は何の感激もなく、むしろ面倒くさい思いさえもって下り立ったこのプラットホームを、わずか一、二時間のうちに、こうも違った心で踏むことがあるのだ、人生というものは妙なものだと思わずにいられなかった。

わたしの家から一時間もかかる道のりを苦にもしないで、わたしは、毎日曜日、坂の途中にある教会に通った。こぶしの花のまさかりの日に、わたしは初めてこの坂を登ったが、はるばる来るわたしをねぎらうように、この坂には、花みずき、えごの木、とちの木などが次々に花ひらいて、わたしを迎えた。

わたしの心にも何かが花をひらきつつあった。長い年月、わたしは何かを求めてさまよう旅人だった。随分、わき道にそれては迷う旅路だった。わたしは旅のふり出しで女子大を中退している。今更、かくすまでもないから告白すると、左翼思想の持主だといって、追出されたのだ。こういうと誰でも、わたしの顔を見直して、

「あなたが、ですか」と言う。

わたし自身だって、そう言いたい。

それは昭和の初めの奇妙な時であった。綜合雑誌をあけても、小説を読んでも、マルクスとか、労働者とか、革命とかいう字が出て来ない頁がないぐらいで、さぞ、そういう活字が増産されたことであつたろうが、わたしたちは、ついその活字に引張られて、マルクスの本を読んでみましようよということになった。そして同級生が相談して、ちゃんとデパートの書籍部で売っている元京都帝国大学教授、河上肇博士の著書、「資本論入門」を読み始めた。残念なことに資本蓄積がどうのこうのとあつても少しも分らず、ただ、今でも覚えているのは、その仲間の一人に、東京の下町育ちの人がいて、「商品」というのを「ひょうしん」と読むことだった。器用に「ひ」と「し」とをとっちがえるものだ、「おしめさま」だの「しばち」だのは聞いたことがあるが、術語までまちがえられるものかと感心したが、うっかり言えば、本の中身が分らないからそ

んなことが気になるのだと叱られそうだから、黙っていた。

そうしている内に、嗅ぎつけることの早い人がいればいるもので、やれ、何のカンパに参加して下さいの、「働く婦人」を買って下さいのと連絡をつけて来た。頼まれるといい気になって、ハイハイと引受けていたら、これがまた警察に筒抜けていたというのだ。わたしたちから金を受け取って行く人は、死んでもあなたがたのことは人に言いませんと誓ったのだから、本当に人に知られるわけはないと、少なくともわたしは信じていた。

警察の方では、わたしたちの学校のカンパの金額がだんだん多くなって来るので、非合法の強力な組織が出来上っていくものと睨んで、気が気ではなかったろう。まさか商品を「ひょうしん」とはこれ如何にと考えたりしているメンバーのいる会であろうとは、思いもかけないことであつたろう。刑事にも警察にもお気の毒なことだった。

あれは確か、昭和初年のパニックのあとで、世の中はたいへん不景気な時だった。取立てた税の使い道のない時代でもなかったろうに、ある日、贓刑事（にせけいじ）でも何でもない立派な警視庁の刑事が二人、わたしの家にやって来て、わたしの部屋を見せてくれと言った。

今でも同じだけれども、その頃から、わたしの部屋は散らかし放題だった。しまったと思ったのは、その散らかった部屋を見られることだった。しかし、幸いなことには見られては困るラブレターの書きかけはない。まあ、上って見て貰おうと観念した。

父はほう、ほう、と呆れた顔をしたが、ガチガチのクリスチャンである母は顔をしかめ、不潔そうに、その刑事たちの名刺をつまみ、わたしを、きつと睨んで言った。

「クリスチャンのくせに、変な本を読むからです。悪趣味だと思っていましたよ」

わたしは父母を騒がせてたいへんすまないと思ったが、何が原因でこんなことになったのかと、途方にくれた。

「国文科の生徒にしては、社会科学の本が多すぎる」

刑事はそう言いながら、手馴れた手つきでわたしの机の上を片づけて行った。わたしには、たいそう手先の器用な弟がいるが、その弟でさえも手のつけようのない机の上が、刑事の手にかかると、どうやら目鼻がついて行くのだった。わたしはそのことにまず感心した。

その上、試験の日程表を反古はぐの中からすばやく拾い出して、

「これは一体、何だね」と、訊ねる。

「試験の日割です」と、答えると、彼らはかわるがわる手に取って、疑わしげに透して見たりした。街頭連絡の予定表かと思ったのかもしれない。それにしてもわたしの机には何と疑わしげな反古の多いことか。全く、不整頓は不徳義である。

彼らは一通り机の上下を片づけてくれてから、ちょっと署まで来てくれといった。父母は兄についていくようにと言った。兄は黙って学生服を着た。

警察に着いて、まず入れられた特高室というのが、小学校の教員室にそっくりだった。わたしは小学生の頃はおとなしい子だったから、教員室に呼び出されて叱られたことはなく、まして、教員室に立たされるなどということは夢にも考えなかった。しかし、立たされ坊主よりもわたしが善良であったというわけではなく、ほんの少し要領がよかっただけだ。

わたしがそんな昔のことを考えていると、早朝なので、がらんとした部屋にひとりで坐っていた年とった刑事が、熱いお茶をいれてくれた。わたしは礼をいって、その茶碗を受けとった。

あとからきくと、そのわたしの落着きかたがよくなかったというのだ。これは大物だと思ったというのだが、何と見当違いをする刑事だろう。わたしの方は「資本論入門」さえ、ろくすっぽ読んでいないから、マルキシズムについて訊ねられたら、早速、恥をかくのだ。心配といえばそれだけだった。わたしが、とぼけて、知らないふりをしているのではない、本当にまだ何も皆目しらないのだと分り、首尾よく家に戻れますようにと念じていたのだが、刑事たちは大物だからゆっくりかかった方がよいと本庁に連絡したのだ。

何でも女子大の左翼の読書会の幹部級の人にはみな来て貰ったが、どの人もすぐ泣き出して改悛の情著しいものがあつたので、すぐ帰すことにした。しかし、この女——つまりわたしのことなのだが——は署に引張って来ても悠々としている。まことに末恐ろしい。少し留置して教育しようという方針になったのだという。

わたしは警察が文部省の出先機関になって、学生の教育に携わっているということを少しも知らなかった。あらかじめそうと分っていたら、お茶で目を濡らしても泣くのだった。

わたしの父は、まだ嫁入り前の娘ではあるし、少々、あわてて、その頃、どこかの政党の幹事長だった松野鶴平さんに電話をかけた。先のことが分っていたら、父だってあれほど心配しなかつたろう。

——この娘は左翼とまちがえられて留置されたりした娘です。マルクスのマの字も知らないのに全くのおっちょこちょいで——と言えば、大抵の縁談は駄目になる。しかし、わたしの夫は、——あ、あ、そうですか——とその娘を引受けてしまったのだ。あ、あ、というのは、何にでもどる癖からであって、決して、留置に驚いたからではない。